

大阪市史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）

〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第 67 号

大阪市史料調査会（編集）

大阪市立中央図書館内TEL06-6539-3333

●近世大坂の新たな名所案内記 —『浪花名所四十八景』の紹介—

大阪市史編纂所では令和6年度に『浪花名所四十八景』を購入しました。選りすぐりの大坂名所48ヶ所が描かれた案内記で、縦13.2センチ、横18センチからなる折本で編まれています。その制作者・年代・版元などについては不詳ですが、書名からして万延元年（1860）2代目歌川広重の手になる『江戸名所四十八景』を模して作成されたものと考えてよいでしょう。

近世大坂の名所案内記といえば、『摂津名所図会』（1798年）、『浪華の賑ひ』（1855年）、『大阪繁昌詩』（1866年）、『浪花百景』（幕末）がよく挙げられますが、『浪花名所四十八景』はこれまでまったく知られておらず、たいへん貴重です。他の名所案内記に比べると、名所の数や紹介文にあたる詞書が少ないですが、イラストは色彩豊かで写実的です。

『浪花名所四十八景』の難点は、描かれている名所地名の示されていないイラストが多いことです。少し時日を要しましたが、48ヶ所すべて特定できました。一つずつ紹介したいところですが、紙幅の関係上今回は断念します。48ヶ所の一覧表を掲げておきますので、本書の閲覧・利用にあたり参考にしてください。



【図】『浪花名所四十八景』冒頭で描かれている「浪花阿弥陀池」（西区和光寺阿弥陀池）。詞書に「此地ハ北堀江御池通にして善光寺出現の池なり」と記されています。

【表】『浪花名所四十八景』の構成

No.	名所	No.	名所	No.	名所	No.	名所
1	浪花阿弥陀池*	13	天満天神*	25	〔四ツ橋〕	37	梅屋敷*
2	忝ヶ鼻大わかし*	14	〔野中観音〕	26	難波橋真景*	38	〔八軒屋〕
3	目標山（天保山）*	15	〔宝樹寺〕	27	〔野田の藤〕	39	〔生玉社〕
4	大坂川口*	16	〔鶴満寺〕	28	〔浜村鬼子母神〕	40	〔天満菜蔬市（青物市）〕
5	雑喉場*	17	堀川楼*	29	阿波座堀（解船町）*	41	真言坂*
6	杵山*	18	〔堂島浜〕	30	〔道頓堀芝居小屋〕	42	浪花四天王寺*
7	櫻乃宮*	19	〔中之島蛸の松〕	31	新清水*	43	木津川口*
8	〔隆専寺〕	20	浪花遊興大津湯*	32	〔戎橋〕	44	住吉大明神社（常夜燈）*
9	〔増井浮瀬〕	21	〔新町郭中太夫の道中〕	33	〔家隆塚〕	45	〔福屋宴席〕
10	京橋口*	22	瑞龍寺*	34	〔日本橋〕	46	〔茶白山〕
11	〔高津宮〕	23	瓢箪町*	35	〔西照庵〕	47	風流一方楼真景*
12	〔二軒茶屋〕	24	〔順慶町〕	36	高麗橋*	48	大坂安治川口*

*印：原本に記載されている名所の地名で、詞書も付されている。

〔〕内：原本に名所の地名記載がなく筆者が推定したもの。

（）内：筆者による注記。

なお本書の裏表紙には、筆記体の英字で“Yokohama, Aug.1866” “C.H.Davy, Capt.R.Engineers”と書き込まれています。“Capt.R.Engineers”とは、イギリス陸軍内で軍事工学およびその他の技術的支援を提供する王立工兵隊（Royal Engineers）、その大尉（Captain）を指します。本書は、幕末維新期の横浜英仏駐屯軍を構成する工兵隊として動員され来日したイギリス工兵大尉（技術将校）のDavyという人物が、1866年8月に横浜で購入したものだったのです。

幕末に来日した外国人が日本土産の一つとして手に入れたであろう代物^{しろもの}が、巡り巡って約160年後に大阪市史編纂所が入手するところとなり、そしてそれが近世大坂の新たな名所案内記の発見につながったわけです。なんという奇遇。歴史資料との邂逅^{かいこう}とはおもしろいものですね。

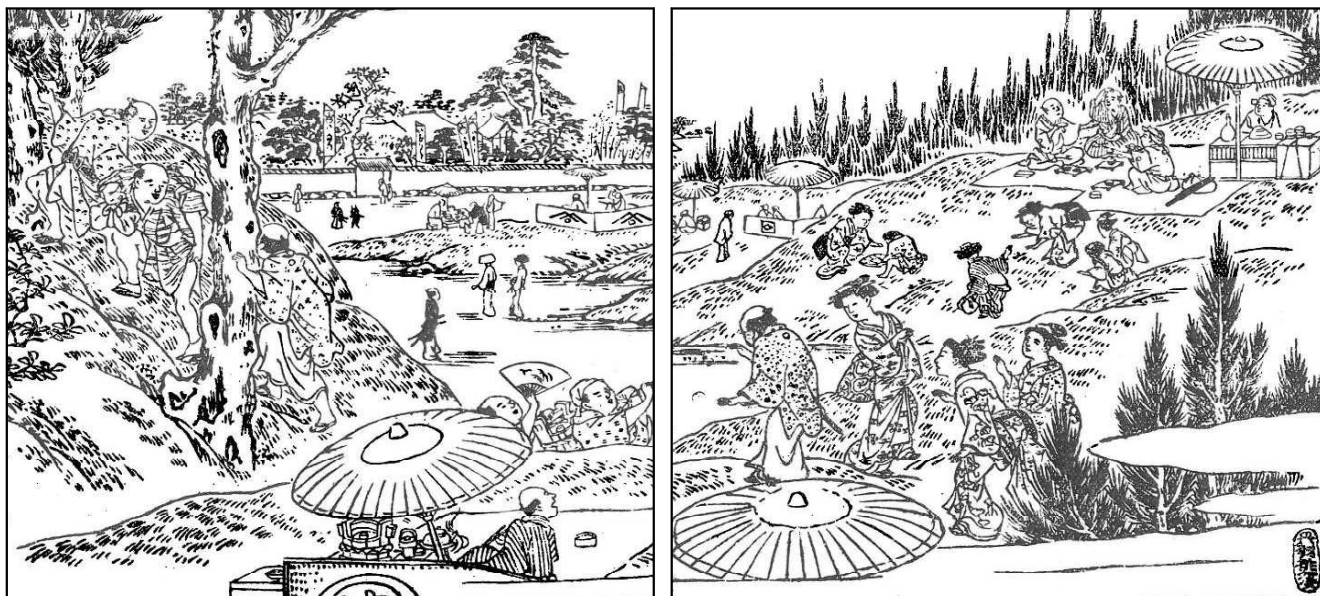
（平良 聡弘）

●近世なにわのピクニック —「野行き」の楽しみ—

今年も大変暑い夏でした。短い秋がもたらす美しい自然や景色を愛でに、ハイキングやピクニックを計画されている方もおられることでしょう。このような楽しみ方は、実は江戸時代にもありました。栗拾いや松茸狩りなど、山で遊ぶのは「山行き」。対して、川の堤や池の端、野中のごさを敷いてのんびりとくつろぐのは「野行き」といいました。上方では「のおいき」と呼びます。この「野行き」の先として大変人気があった場所を、その様子と共にご紹介しましょう。

大坂城玉造口の南東に広がる、通称「杉山」と呼ばれた地域は、杉の木立が連なる小高い丘でした。四方に開けてとても眺めが良かったそうで、当時のガイドブック『摂津名所図会^{ずえ}』には、初午参り^{はつうま}（旧暦二月最初の午の日に稻荷社が行う祭礼に詣でる風習）の日に賑わう様子が掲載されています（下図）。ごさの上でまったりしている人、遊んでいる人、草を摘んでいる人…。みな、とても楽しそうですね。同様の本『浪華の賑ひ^{にぎわい}』にも、「都下の老若ここに来りて弁当をひらき、竹筒^{ささえ}をかたむけ諷ふあり、踊るあり、煎茶をたのしむ老人、風のぼす小児^{うた}、春草をつむ婦女子など、おもひおもひに遊興して、紅日西にかたむくををしめり^{いか}」と人々の様子が描かれています（惜）。

大坂城追手口前の「番場の原」も、大坂城がとてもよく見える場所でした。ここも初午の日は



「初午ノ日 杉山群聚」（見開き挿絵の一部）

（古典籍刊行会『摂津名所図会 上巻』より。奥に玉造稻荷神社らしき建物が見え、城側から南東を見た構図と思われる。）

賑やかだったようですが、人々は季節を問わず、天気の良い日は「城見」と称して御城見物を楽しんだといひます。大坂城代も務めた水野忠邦^{みずのただくに}の家臣が筆者とされる上方見聞記「浪花洛陽振」では、ここへ家族らを連れ出し、重詰めや酒を持参して楽しむ人々の様子が書かれています。

これによると、1辺が7寸(21cm)くらいのお重の中身は海苔寿司、タコの足やかまぼこ、焼玉子やクワイの類い。酒は銅製で平たい丸型の「吸筒」^{すいづつ}(水筒の一種)に入れたり、樽で持つてくる者もいたそうです。酒につきものの肴は、2寸4分(7.2cm)に切ったコンブを焼くか油で揚げたもの。これを持参した小皿に並べてつまみます。京都では、野行きの弁当(「おべん」といえば食器まですべてお膳籠に入れて持つて行くのが一般的だったようなので、大坂もこれと同様かもしれません。持ち運びは少し重そうですが、食べて飲んで遊んで、これぞ最高のピクニックですね。時代をこえて楽しめる「野行き」、皆さんもいかがですか？

(白杉 一葉)

●大坂の飛脚問屋 —「速達」はもちろん、今でいう「簡易書留」まであった—

江戸時代の人々は、誰かに送りたい手紙や荷物がある時、飛脚問屋に持ち込みました。飛脚問屋では、雇っている飛脚たちに命じて目的地まで運ばせたのです。飛脚については、江戸の飛脚問屋を取り上げた巻島隆氏の研究がとても詳しく、代表的な研究といふことができます(※1)。ここでは最初に、氏の研究を中心に、飛脚の概要をみておきたいと思います。

飛脚には、到着までの日数を指定した「早便」^{はやびん}と、日数指定の無い「並便」^{なみびん}がありました。どちらの便でも、飛脚問屋に雇われた宰領飛脚^{さいりょうびきやく}が、1頭～5頭の馬に荷を載せ、自分もその内の1頭に乗って、目的地まで運びました。巻島氏によると、早便は江戸一大坂間を6日～10日で運んだのに対し、並便は15日から30日かかることもあったといひます。その他に、馬を使わず、走り飛脚が「リレー形式」で運ぶ、「仕立飛脚」^{したてびきやく}という便もありました。走り飛脚は、飛脚問屋に書状や荷物が持ち込まれ次第出発し、中継地点のある宿場町^{しゆくばち}ごとに、次の走り飛脚に荷物を受け渡していきました。早便より圧倒的に速く、最速の便なら江戸一大坂間を3日半で届けました。

飛脚について簡単にみてきましたが、実は大阪市史編纂所には、大坂の飛脚問屋に関する史料「飛脚問屋定書」^{さだめがき}が所蔵されています。幕末期のもので、飛脚問屋同士の申し合わせや、江戸一大坂間・大坂一西国間の便の値段などが記されています。江戸一大坂間については巻島氏の研究に詳しいので、ここでは「飛脚問屋定書」の内、大坂から中国・九州地方や、関西各地へ出された便

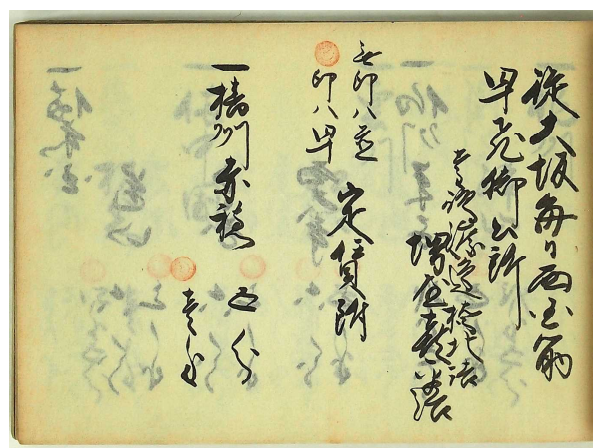


写真1：堺屋喜平治方、赤穂までの飛脚賃
(「飛脚問屋定書」大阪市史編纂所所蔵)

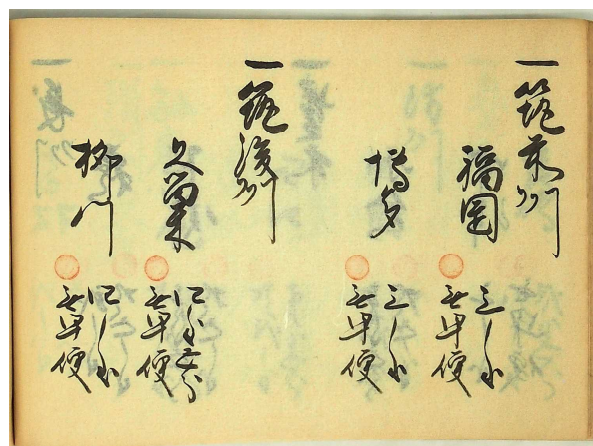


写真2：堺屋喜平治方、福岡・博多などへの飛脚賃
(「飛脚問屋定書」大阪市史編纂所所蔵)

を取り上げることにします。

前頁の写真1・2は、大坂堂島の渡辺橋の北側に店を構えた飛脚問屋、堺屋喜平治に関する記述箇所です。堺屋は中国・九州地方への便を扱っていましたが、大坂から赤穂^{あこう}までの値段が、並便は銀5分で早便は銀1^{もんめ}匁と記されています(※2)。九州の博多までだと並便が銀3匁で、早便は扱っていない由。写真とは別の箇所ですが、堺屋では九州より近い出雲松江までの並便を銀5匁としているので、この値段には距離だけでなく、注文の多い宛先かどうかという点も影響しているようです。また、津国屋宇兵衛は堂島に店があった飛脚問屋で、姫路方面への便を扱っていました。明石や加古川など途中の町を含めて姫路まで、大坂からの値段は一律で、並便が錢24^{もん}文となっています。この津国屋では、早便のことを「朝入^{あさいりじょう}状」と呼んでいました。これは大坂を出た「翌日^{よくじつあさ}朝着」くためだそうで、姫路まで錢200文かかりました。

次に関西各地への便をみてみましょう。紀州方面への便を扱う万^{よろず}屋喜兵衛では、和歌山まで並便が錢12文で早便が錢36文。紀伊田辺までだと、並便が錢38文で早便は錢124文となっています。万屋では、「判取^{はんとりじょう}状」も扱っていました(田辺まで錢124文)。これは、宛先に手紙を届けた際、届けた証明として相手の判をもらう便のこと。配達時点での証明を残す点では、現在の「簡易書留」にあたる便です。大和屋六蔵は、大和方面への便を扱った飛脚問屋ですが、大坂から奈良まで、並便が錢16文、判取状は錢50文としています。飛脚問屋では、書状だけでなく、荷物や現金の送付も行っていました。大和屋の場合、1貫^{かん}目(3.75kg)の荷物1つで銀6分、現金は金1兩(小判1枚)につき錢28文で、奈良まで送ることができました。

大坂の飛脚問屋たちも、様々な便を扱っていたことがわかります。現代でいえば、早便は「速達」、判取状は「簡易書留」、荷物を送るのは「小包」にあたり、現金の送付は「現金書留」でしょうか。現代の我々が郵便局で様々なサービスを利用するのと同じように、江戸時代の人々も飛脚問屋で、目的に応じて様々な便を利用していたのです。

※1 巻島隆『江戸の飛脚～人と馬による情報通信史～』(教育評論社 2015年)

※2 銀は10分で1匁。銀と錢では、天保14年(1843)の公定相場が銀10匁＝錢1000文(『大阪市史』第2巻729頁)なので、銀1匁＝銀10分＝錢100文の計算になるが、幕末期の相場は大きく変動した。

(吉川 潤)

【刊行物】『新修大阪市史 史料編』第8巻「近世Ⅲ・経済Ⅰ」を刊行しました。

(本体価格 5,500円 送料実費 2026年1月刊)

『新修大阪市史』をはじめ大阪市史編纂所の刊行物は、大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。詳しくは大阪市史料調査会(大阪市立中央図書館3階・大阪市史編纂所内 TEL06-6539-3333)までお問い合わせください。

取り扱い書店 ―― ジュンク堂書店(大阪本店・難波店)

紀伊國屋書店(梅田本店 ※『大阪の歴史』最新刊のみ)

■「編纂所だより」は、年2回発行しています。

さまざまな歴史の話題や日々の活動などを、みなさんにわかりやすくお届けするニュースレターです。

大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています。大阪市立中央図書館(3階大阪コーナー)及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。

(令和8年9月発行)